

第2回 明日のとやま教育創造懇話会の議事録

- | | | |
|---|------|--|
| 1 | 日 時 | 平成 19 年 12 月 20 日 (木) 10:00~12:00 |
| 2 | 場 所 | 富山県民会館 8 階 キャッスル |
| 3 | 出席委員 | 西頭座長、新井委員(座長代理)、伊藤委員、岩井委員、梅沢委員、大楠委員、大橋委員、神川委員、紙谷委員、川又委員、鈴木委員、田中委員、橋本委員、廣本委員、石井委員(知事)、八木委員(教育委員長)、麻島専門委員、大岩専門委員、西川専門委員、結城専門委員 |
| 4 | 議 題 | 「いじめ対策、不登校対策について」 |

(提出資料について事務局から説明)

(座長) 新しい文科省のいじめの定義は以前の定義とどこがどう違うのか。

(事務局) 従前のいじめのとりえ方は、学校の方で、教員がこれはいじめであるかどうかを先ほど申し上げた三つの観点(自分より弱い者に対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を連続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じている)から見て判断し、発生件数という形で報告していた。従ってかなり限定的で、文部科学省の説明によると、どちらかというに加害者の立場に立ったとりえ方であった。新しい定義によると、被害者の立場に立って、その児童生徒がいじめられていると感じれば、それはいじめであると認定し、学校側はそれを認知した件数とする、そういうとりえ方になった。

(委員) 、 、 とあるが、この を重要視しろ、結局はそういうことですね。今までも は項目に入っているが、ここをもっと重要視しようということだと思う。

(座長) そうするとかなり範囲が広がる。

(委員) だから急に統計も数値が上昇したものと思う。

(座長) このいじめ・不登校の問題は外から見ているだけでは実感しづらい。そこで本日は、実際の学校現場の状況について専門委員の先生方からお話を伺いたい。まず、最初に、小学校における特徴的な事例や現場の対応・対策などについて報告いただきたい。

(専門委員) 小学校教育では、学力保障が大きな柱だが、もう一方で、心の教育ということ大きな柱ととらえて力を入れている。いじめ・不登校については、小学校でもいろいろと心配な状況が幾つも見られるように思う。各学校の方では、教職員が一丸となって共通理解をしながら指導に当たるという基本的な体制をどの学校も取りながら、日々力を入れている。また、学校一丸体制と言ったが、保護者との連携ということも一つ大事にしている。

事例や学校の取り組み・対応策についてということなので、少し話させていただく。

まずいじめの事例についてであるが、本当に多岐にわたっており、全部紹介するわけにもいかない

が、幾つか紹介させていただく。

例えば、子どもたちが相手に非常に苦痛を与えるような言葉を安易に使うということがある。「死ね」だとか「消えろ」ということを仲間に対して使うという事例も実はある。自分が不利になったり、うまくコミュニケーションが取れなかったりする子どもが自分を守るために使うことがあるようである。あるいは、学級の仲間に嫌がらせをして、その反応を楽しむ、というのは語弊があるかもしれないが、そのような子どもがいるということも聞いている。相手が困っていることを分かっているが、自分がやりたかったからやった、と。背景というか、なぜということを考えてみると、やはり学級内で自分の活躍の場がないことが一つの不満になっていたり、家庭的に満たされていなかったりということもあるようである。あるいは、高学年の学級で仲間をからかう子どもがいる。現代だけではないのかもしれないが、優等生的な仲間に対してねたみを持つ。それで仕事を押しつけたりするなどの意地悪な行動をとる、そういうことがある。そのような行動が見られるということである。ある意味で自分も何か活躍したい、認められたい、そういったことが背景にあるのかと思っている。あるいは最近、厳しく指導をすると、そんな厳しいことを言うと死んでしまうという言葉も聞いたと聞いている。

不登校については、生活のリズムが崩れているために欠席が多いという子どももあり、不登校の問題に関してはなかなか理由が特定できないということがある。朝起きられない、学習の準備ができていない、そのために欠席をするということで、家の都合による早退ということも見られる。そのために、学校での居場所を自分で見いだせなくなってしまい、元気がない状態が生まれてくるということがある。あるいは、低学年、中学年のときにも少し登校を渋る傾向があり、その都度担任の努力によって何とか登校できるようになっていたのだけれども、高学年になって学級に入れなくなった。低学年、中学年のときの経験から、保護者も担任も何とか学級に入れようとしたが、それがかえって抵抗になって、登校することができなくなったという事例も聞いている。

対策というか、学校の取り組みということでは、何とかこういったことがなくなるようにと各学校は一生懸命努力している。

例えば、一つは、心が豊かになるような土壌をつくる取り組みをしている学校が幾つもある。分かる授業や楽しい授業への取り組みを通しながら所属感をしっかりと持たせる、あいさつ運動を徹底してみる、自然体験、社会体験といったものを大切に学習を取り入れる。あるいは、PTA、親子活動もどの学校も今よくやっている。「トイレ掃除に学ぶ会」とかで一緒に掃除をしたりということでも心を豊かにしていく、育てるという取り組みの例もある。

あるいは、早期発見ということがよく言われる。今、パソコンやメールということで、子どもたちの世界が見えにくくなっている。それをいかに早期発見していくかというのは大きなキーポイントだと思っている。そこで教育相談、あるいは相談ポストなども設置するとか、全教職員で気になる児童や最近の気になる様子について共通理解をしながら子どもたちをしっかりと見ていこうとしている。

三つ目に、子どもたちが自己有用感や自己存在感を持てるように、とにかくいろいろな機会を通して、子どもを認める、励ます、そういったことを大切にしていく、そのような自己存在感が持てる学級運営を大切にしているということがある。達成感、成就感を味わう機会を意図的に設定することもある。

先ほども紹介があったが、なかなか人間関係がうまくつけれないというようなこともあり、みんなで一緒に遊ぶ日を設ける、掃除の日を1週間に1回抜かしてそういったことを取り入れている学校もある。あるいは、人間関係づくりのいろいろな手法があるが、それらを学び、いろいろな手法を取り入れながら人間関係づくりを何とか進めようとしている学校もある。

あと、連携した取り組みということで、民生委員や児童相談所などの外部機関との連携も取り入れながら考えている。

最後に、基本的なこととして、学級運営というか、小学校の場合は学級担任制であるので、とにかく先生と子ども、子ども同士が信頼関係をしっかり結べることが基本になくは駄目である、とにかく暖かい雰囲気をつくろうということで、自由にものが言える雰囲気づくり、こういったものを大事にしていくことに取り組んでいる。

いろいろな対策を取り入れてもなかなかパーフェクトなものはないわけであり、いろいろな対策を重層的に行うということも非常に重要と思っている。

(座長) 非常に多様である。中学校について報告願いたい。

(専門委員) かなり詳しく述べられたので、簡単に話させていただく。

いじめについては、正直に言って、なくすのはなかなか難しいというのが本音である。いじめっ子がいていじめるといのは分かりやすいが、これは大変少ない。先ほどの座長からの話はそのようなことだったと思うが、人間関係の中で少し意地悪な子がいて、仲間を誘っていじめ、誘われた方は、いじめないと自分が今度は仲間はずれになるかもしれないという思いからやる。これはいつでも逆転する可能性を持っているという例が最近のいじめで見られる。いじめている子は特別な子かということ、そうではない。また、いじめられている子どもどこかに心の問題というか、そういうものを持っている場合がある。

いじめは見つけにくく、いじめられている子はなかなかそのことを言わない。教員にも親にも言わない。恐らく、いじめられているのは自分が悪いからだ、自分の方に問題があるからだ、親に心配をかけたくないなどという気持ちがあり、なかなか言い出さない。何とか早く発見するために、私の学校では毎月同じ日に全学年全クラス一斉に無記名で、いろいろなトラブルを見たことがないかということを書かせたりしている。また、いじめが見つかれば、その学年全員で共通理解してチームで対応していくという方法も取っている。ただ、見つけにくいというのが悩みの一つである。

それから、新しいいじめが出てきている。携帯メールによるいじめ、ブログでのいじめなどであり、こういう新しいタイプのいじめで学校は後手に回っている。

次に不登校についてである。不登校は学校へ行けないという症状であり、原因は様々である。病気に例えると、おなか痛いというのが症状だとすると、原因は食べ過ぎ、寝冷え、胃かしよう、いろいろあるように、不登校という症状に対して原因は様々である。先ほど、事務局から説明があったが、嫌がらせをする生徒や嫌いな、合わない教員がいるというのはまだ対応できるが、不安などの情緒的な問題によるもの、育ってきた途中で何か問題があり、思春期に入り中学校で立ち止まったという対応の難しいものもある。不登校が出てきた最初のころはこのタイプが多く、そこで、本人に力が付くまでそっとしておきましょうというのが当時の対応であったので、今も、そっとしておくのがいいという意識、それから、誰にでも起こり得ること、うちの子だけが特別ではないという意識という二つの意識が保護者にあり、対応が遅れがちになってきたと思っている。

不登校にも、無気力の不登校、遊び・非行、最近は何となくの不登校、勉強についていけないから学校が嫌というまで出てきている。どうも学校へ行くことへのプレッシャー、義務感が親にも子どもにも薄れてきているという気がする。

また、中学校は、部活がある、校則がある、入試に向けての勉強がある、成績が比較される、教科

ごとに先生が変わるということで、子どもにとって小学校と比べ大変窮屈な空間になっている。そういうところへ向かっていく心のエネルギー、元気が十分でない子どもたちが増えているという気持ちも持っている。

対策の方は先に話されたので、省略させていただきます。

(座長) だいぶ実態が分かる。

次は、スクールカウンセラーとして学校に関わっておられる委員にお願いします。

(委員) 今まで専門家といわれる人たちは、学校の外の相談機関にいて、いつでも相談に来てくださいと言っていたわけだが、一步近づいて、児童生徒、保護者、教職員が学校で相談できる、気になる段階で相談に乗れる体制がスクールカウンセラー事業だと感じている。私自身も週8時間、2つの中学校に勤務する者として感じていることの一部をお話する。

どのような子が不登校になるのか、どのような学校が不登校を生むのか、どのような子がいじめられるのか、どのような子がいじめをするのかということが随分論じられてきた。それはとても大事なことだと思うが、今やはりもっと大事なのは子どもたちの不調に気付いたときに大人が何をするのか、あるいは何ができるのかだと思う。まさにその子どもの「不調」と私は感じるのだが、子どもたちの言葉で言うと、「先生、おれ、今日絶不調」というような、周りから見るとわがままととらえられるような行動にでも、子どもたちにはどうもうまくいかないという感じがもうずっとある。何ができるか何をするかというときに、私たちがやっていることは、一人一人の事例をとにかく丁寧に見ていくことである。いじめの場合は周りの子も含めてということだが、とてもナイーブな部分に触れていくことになるし、表に出ていることを解決するだけでも多くの時間やたくさんの人のエネルギーを要するようになってきている。誤解を恐れずに言えば、いろいろな意味で難しくなっている。

コミュニケーションを回復していくには時間がかかる。そのことはご存じだと思うが、相談しているのになぜ良くならないのかという不満を耳にすることがある。すぐにでも調整できることはしているわけで、働き掛けながら成長を待っているというプロセスがそう見えるのかもしれない。先ほど専門委員が述べられたが、働き掛けについても、登校刺激をするかしないか、教室に入るか入らないかという古いタイプの二者択一ではなくて、いろいろな機会をとらえて「待っているよ」と伝え、今やれること、例えば保健室や相談室に登校するとか、適応教室に通うとか、家庭訪問をして勉強するというのをしながら、保護者の不安にも対応していくことを、担任をはじめ学校や地域の方が協力してやっている。私は、登校したとか教室に入ったということだけが成果ではないと感じている。もちろんそうなってくればうれしいとは思いますが。

一方で、子どもを定期的に学校に通わせるということに協力を得られないように見える保護者には、学校からの働き掛けだけでは難しい場合が多いと思う。その家族を傷つけない形でほかの機関や地域の側面からの協力が得られれば、うまくいくケースも出てきていると思う。

平成11年に文部科学省が、中学3年のときに30日以上欠席した子の5年後の追跡調査をした。20歳の時点で3割が学校あるいは学習支援施設に通っていて、6割が何らかの仕事に就いているという結果であった。その数値をどうみるかは置いておいて、不登校のときも、卒業後も半分以上の人が支援を求めており、その支援の内容は心理相談であったり、出会いの場であったり、学習支援、進路相談、技術指導などが上位を占めているようである。生活のリズムの崩れや、学力や知識不足に苦労したと回答している人も多い。実際に壁を乗り越える際に助けになったものとしては、やはり人間関係

に関する事柄を大半の人が挙げている。言うまでもないことだが、人間関係で傷ついた子も、人との出会いで希望をつないでいくということだと思う。

もっと具体的なことを話せばいいのだが、それは大変長くなるので、「明日の」ということを考えるときに私が感じていることを述べる。子どもが育つためには子どもの群れと大人の群れが必要だといわれている。どちらも非常に心もとない社会になってきた今、辛うじて学校にはそれが残っている気がしているが、その学校の中で起こる不登校やいじめというものに、どうも私たちは焦って、とにかく結果、成果につなげることを考えてしまう。もちろんそれは当事者の子どもたちにとってとても救いになると思うが、いろいろな形の支援や応援をしていくことが、実は彼らのもっと先の人生の精神的な不調、例えば、うつや虐待や依存症も含めて、そういうものの予防に役立ってくれるということ、さらに、当事者だけではなくて周りの子どもたちも、挫折しても切り捨てないのだ、それで終わりではないのだということを実感してくれる、そしてその子たちが安心して次の、自分の子どもを育てていってくれること、というのが一番「明日」という意味に近いのではないかと思う。そういうことを思い、子どもたちの不調に何ができるのだろう、この子の場合には何をしたらいいのだろうと考えながらやっている。

(座長) 学校現場だけではなく、やはり社会との連携が必要だということと、20歳ぐらいまで後遺症が残るといった話には少し驚いた。

この問題を解決するためにどうしたらいいか、いろいろな視点があると思う。学校あるいは家庭、地域として、最初に、学校においてどういう形で対応すべきかということについて意見交換したい。

(委員) 事務局の説明にもあったが、高校のいじめ、不登校の問題は、中学校に比較すると数は少ないが、現実として、相当な数があるし、内容を踏まえると大変大きい問題だと認識している。今ほどの各専門委員からの指摘のとおり、こうした問題が潜在化、複雑化し、そして子ども一人一人の心の問題にあるということで、教師にしる保護者にしる一生懸命子どもに向かっているが、それらに対応する術、本当に適切な対応を認識して取ることができないという現状がある。

そういう意味では、子どもたちのこういう問題にきちんと対応するためには、やはり専門家の立場からのサポートが必要だと思う。今、委員の話を聞いてなおその意を強くした。現在、高校においては1校当たり年2回のスクールカウンセラーの派遣をさせていただいているが、やはり現実に足りないということがあり、幾つかの学校では私費でスクールカウンセラーを雇用して対応しているという実態である。そのほか、全体的な意見、発生件数、それから各学校あるいは保護者からの要望を聞くと、少なくとも年5回程度はスクールカウンセラーの派遣をぜひともしていただきたい、そして、そのケアを生徒、教師との相談、それから保護者への相談ということで、多面的にサポートしていただく必要があると考えている。高校の相談体制の充実が必要だということで述べさせていただいた。

(委員) 今週、久しぶりに中学校で授業をしたのだが、やはり大人が子どもに何かをして解決してあげようという姿勢よりも、子どもの方に何か自分で気付いてもらう仕掛けを大人がしていかなくてはいけないという実感を持った。

中学校で、県の教育委員会で作られた学習プログラム、「親となる準備段階のプログラム」を使って授業を行った。そうしたら、子どもたちがいじめに当たるような嫌な言葉を発するときというのは、委員が述べられたとおり、自分が絶不調のとき、体調が悪いときに、軽く「死ぬ」とか「消える」と

か嫌な言葉を言っている。つまり、本当は、いじめている相手よりもむしろ自分がもっと弱い状態になっているのだということに子ども自身が気付いて言ってくれることがある。

そのほかに家庭での関係のことで、準備期プログラムを使ったら、自分がほかの人の立場になって考えられる。今まで特にそういう実感がなかったし、特に自分より上の親の立場になって考えられることはないと思っていたのだけど、「母親だったら何て言うだろう」と考えたときに、自分は「お母さんてうざい」と思っていたり、友達のこともしうざいとか嫌だなと思ったりするけど、時にうさい発言にも愛情があることもあるのだということに、子ども自身が気付く。そのことがクラス全体にも広がって行って、子ども全体の大きな気付きになることもある。

全部そういうことで解決できるわけではないが、そのときに言った子どもの言葉ですごく印象に残ったのは、「僕はいつも親や周りから大好きだよ、きみは大事な人だと言ってもらいたいとばかり思っていたけど、親に対しても僕はお母さん大好きだよと言わなくてはいけなかったのだなということに気付いた」。子どもから見ると本当はうざいと思うことの方が多いのだけれども、それが、子ども自身の口から出たので、逆に私も気付かせてもらった。子ども同士、生徒同士、家庭同士でそういう気付きの仕掛けを考えていかななくてはいけないということに気付いたということである。

(委員) 先ほどから小・中・高も含めて、専門委員や委員の方々のお話を伺っているが、では幼稚園あるいは保育所、幼児期はどうなのだろうという視点から少し話してみたい。幼いからそういうことはないとはいえない。それなりにやはり不登校というか、不登園というのものもある。

一つの例として、4月に親に対して新入園児歓迎会があり、担任を紹介する。そうすると親の好みではない担任が決まったときに、親同士の間で、「あんたはよかったじゃない、うちは外れよ」と、担任が当たり外れというようなこと、親同士で言う。自分の子どもの前で心なくそういう会話をする。すると子どもが「私は嫌な先生と1年間過ごすのだ」ということで、次の日から玄関に入ってくることを渋る、親と別れることを渋るという現状があることを考えると、親って何なの、と思う。先生を尊敬するというか、礼を大事にするという基本的な人間の持つべきものが欠落しているのではないか。親にライセンスをという話も聞いたことがあるが、先ほど述べられたように、親を学ぶ場をもっと大事にしていきたいと思う。先週の土曜日に育児講座と名付けた保護者会を開いた。そこへ親に来てもらうにはステージの何かを見せなくてはいけない。踊りや劇の発表を見せます。親のお目当てはお子様の出番のビデオ撮りだけで、それが済んだらさっさと帰っていく。本当のあんこのところの講演のときはいなくなる。3歳児が終わると、どーっと3歳児の親が帰ります。私が玄関に立ちふさがっても間に合いません。あとで話を聞くと、すぐ近くにココス(注:ファミリーレストランの名前)があるので、講演が終わるまで父親がそれを待つ係で、母親が先にココスの席取りをする、ココスは保育所に何かがあると満員になる、という話もあるくらいである。親として本当にこれでいいのか、親を学ぶ話に耳を貸そうとしない、そういう親の姿を見るときに、この親たちは子どもが学校に行ったらどうなるのだろうという憂いを持ちます。幼児期にこそ親との接点をしっかり持たせなくてはいけないという責任を感じている。

次に、今日頂きました資料の「いじめ問題への緊急提言」の中に「いじめを生まない素地作り」として、「おじいちゃんおばあちゃん、それから地域の人たちも子どもたちに声を掛けて、子どもの表情や変化を見逃さず、気付いた点を学校に知らせるサポートを積極的に行う」などとある。県の方で今進めているシニアサポーター養成事業というものがある。近所のおじいちゃんおばあちゃんたち、50代60代では孫を見るのに十分な力を持っていて、しかも特技を持っておられる、宝物の近所のおじ

いちゃんおばあちゃんたちです。絶えず保育所や幼稚園の方に足を運んでもらって、子どもに深い愛情を分けていただいています。このような「シニアサポーター」は今私どもの地域で 70 名ほど県内合せて 600 名近いと聞いています。「いじめを生まない地域づくり」の戦力になっているし、そしてまた、子どもとの出会いがおじいちゃんおばあちゃんたちを元気にし、生きがいにも大きなプラスになっていることを紹介して終わりたい。

(座長) ココスとは何ですか。

(委員) ファミリーレストラン、ココス。そこは一定のお金を払ったらドリンクを自由にずっと飲んでいられるので、長く話ができる。

先の話を受けて、うちの娘の実際の話だが、やはりトラブルがあったときに親同士で話をすることがあり、そこで、幼児期にきちんと親子関係ができていなかったその延長線にまさにあるなということを感じたことがある。それはやはり、多分家庭ではどの子どもともいい子だったりする。それをほかの人が見たときに、親自身が子どもを信じない。「うちの子はそんなことしていませんよ。」親だったらもう少し多面的に自分の子をとらえればいいのですが、それができない親が非常に増えている。

あえて私の方から「こういうことがあったのですよ」と言うのは何なのだが、「学校の現場ではどうも先生は毎日くじられていますし、うちの娘は現に傷を作って帰ってきましたよ」と事実をお伝えすると、その親はびっくりして、本当に自分の子がやったのか？と信じられないでいることが先日ありました。学校の先生はとても熱心に解決に当たってくださっているが、なかなか先生から直接的にというか、親に事実を伝えることはできても、その背景や親に一步踏み込んで入りにくいところが非常にあるのだなということを感じた。例えば、先生が暴れている子どもを抑えるときにできた傷をずっとひた隠しにしていた、表面に出していなかった。それがなぜ分かったかということ、やはり娘から「先生もやられているんだよ」という話を聞いて、「先生、大変ですね」という話になったのだが、どうも先生だけでは解決できないことも往々にしてあるのではないということを感じた。

私たちの方でもいくらでも、保護者としても、先ほどのシニアサポーターというか、近所にいるおじいちゃんおばあちゃんや働いていないで家におられるお母さんたちの力で、もう少し子どもをちゃんとサポートしていけたらということも学校の方にも提案したのだが、学校はやはり学校としての立場、責任感があるという感じがする。そこに外からの助けを簡単に受けてしまうということはいけないのではないかと先生方の正義感というか、責任感のようなものを感じた。PTAの立場、保護者の立場にももう少し、また学校と違った側面で見てもらえる目、助けてもらえる手というのを差し伸べていただきたいという感じがした。

それと、私はスポーツ少年団の立場であるが、そこでは学校とは違った活動を子どもたちがしている。たくさんの方が指導に当たっている中で、保護者が時に一緒に子どもたちの顔を見ている。そういうところとも連携して、もう少し子どもを全体で見たい。また、子どもが変化していくには親の変化の影響というのはすごく大きいと思うのだが、その親が話し合いができる場、学ぶ場というものをみんなで作っていけたらとも思う。先ほどのココスが満員になるという話はまだいい方と思って聞いていた。自分の学校だと、PTA総会で役員さんたちが一生懸命話をしている中でも、好きな話をしている親がとても多い。授業参観に行っても自分の話をしていて、子どもの様子を見ていない親もとても多く、最近すごくがっかりした。親同士の中でも、もう少し自分たちが共に学び合う場を持っていかなくてはいけないのかなと思った。

(委員) 学校における対応策ということで3点ほどお願いしたいと思うことを言わせていただく。

1点目は、先ほども話があったが、今年、県内の全中学校に専門家のスクールカウンセラーを配置していただき大変効果が上がっていると県PTA联合会の方でも聞いている。学校の先生方もそれぞれにこういった場合にどう指導したらいいのかという研修を受けていらっしゃると思うが、やはり専門家が学校に来るといのは大変早い対応ができるのではないかと、小学校においても定期的にスクールカウンセラーを配置していただけるようお願いできないかと思っている。

2点目は、スクールカウンセラーの委員からも、まず一人一人の事例を丁寧にみていくことが大事だという話があった。その点で、先生方は本当に一人一人の子どもたちを丁寧にみて指導していただいていると思うが、私の子どもが、高校生のとくに学校に行きたくないと思っていた時期があった。その時、高校の先生が子どもの得意な分野の仕事を任せくださり、それを契機に学校へ行きたくなくなったことがあった。一人一人をよく見て、その一人一人を伸ばす指導というものにさらに力を入れていただくと、子どもの居場所が学校にでき、対応策になるのではないかと思う。

最後3点目は、専門委員からの新しいいじめがあるという話である。携帯メールによるいじめ、またブログによるいじめというものがあるということだが、実は、県内のある学校のPTAが学校と協力し、ある企業の協力もいただいて、学校で、インターネットの正しい知識についての保護者への指導や啓発活動を実施された。子どもが実際にインターネットをしながらか、こういうことをしたらこうなるのだよとか、こんなことをしてはいけないのだよという指導を受け、大変効果的だったと聞いている。これからますます広がるであろうこの携帯メール等によるいじめの抑制のためにも、是非県下においてこういう支援をしていただけたらと思っている。

(委員) 昭和55年から僕は静岡で、いわゆる不登校引きこもり、今でいうニートの人たちと共同生活をしてきた。静岡では7年間で約500人、富山に来て今度は20年間で、人数はかなり少ないが、約300人と共同生活をしてきて、結局27年、いわゆる不登校、引きこもり、ニートと過ごしてきた。一番初めの昭和55年当時の15歳の少年というのは今はもう40歳になる。あくまでも現場からだが、少し意見を言わせていただく。

不登校、引きこもりの原因、これは例外を除いて、もうそんなに難しい問題ではない。あと解決策、これも理屈上はそんなに難しい問題ではない。ただできるかできないか、ということだけである。だから、今、学校に対してという提起があったのですが、学校に対して何を希望するか、何を期待するか。結局、学校の先生が忙し過ぎる。それをどうにか、まず生徒がもっとよく見えるところに立つ、生徒をよく見られる目を持って欲しいということである。そのために仕事を増やすのではなく、逆に事務仕事をもっと減らせということである。

もう一つ、もっと地域に下りてきて、下りてくるという言い方もおかしいですが、地域ともっと付き合って欲しい。これは現場に対する要望ではなくて、現場を管轄する人の問題ですが、とにかくもっと事務的な仕事を減らした方がいい、減らして欲しいというのが期待、希望である。

(座長) 今、委員から学校に対する要望が出たが、今あまり学校にこだわらなくてもいいと思う。少し学校から離れた距離にいらっしゃる方のご意見も拝聴したい。

(委員) 先ほど来いろいろな話を聞いて、多分これは日本が何百年かかかってきて築いた日本人

らしさという精神風土が、こわすかの年月でがらりと崩れてしまった。つまり、社会の価値観がゆがんでしまったために、子どもたちに対してもいろいろな弊害が出てきているのではないかと。先ほどもあったが、死ぬとかという言葉というのは、これは死生観にかかわることなのだが、身近であった死というものが身近でなくなったという社会環境、住環境、そうしたものもあって、痛ましいことは痛ましいことだ、悲しいことは悲しいことだ、うれしいことはうれしいのだという、素直な喜怒哀楽が身近になくなったのではないかと。そしてそれを表すことができなくなったのではないかと考えている。

正義とか節度とか、あるいは信義であるとか、そのあたりの価値観というのが日本人にはどこかにあったと思う。それが、先ほどのココスの話もあったように、そのココスの親御さんの年代からもうがらりと崩れて、「自分さえよければ」となっているのではないかと。思う。

例えば、私はテレビゲームは全然したことがないが、あれにもものの考え方が自己中心的になる、他者のことを理解できなくなる弊害を指摘する人もいる

また、メールやブログの話があったが、これは現在のIT社会の負の部分だと思う。大人の社会の縮図みたいなものなので、誹謗中傷するとか何とかというのは、結局子どもたちだけの世界ではない。今まで持ち慣れない便利な道具を持って、それをどのように使うかという倫理観を子どもに求めてもどくだい無理である。そういう訓練を受けていないのだから。大人にさえできないのだから。ここまでネットに書いていい、これ以上だと相手が傷つくだろう、あるいは嫌がるだろう、そんなことをお構いなしに自分の世界で、仮想の世界で突き進んでいくものだから、結局際限がなく、相手を追いつめるようなことになるのではないかと。思う。

あるシンポジウムで、「校下」という言葉、富山県特有の言葉で全国にはないようだが、その「校下」というのは、何々小学校の下と書く。だから昔は学校が上であった。地域のシンボルだった。であるからそこでは当然、先生も尊敬されていたと思うし、親以上に子どもたちにとっても先生の言うことは絶対的だった、そういう時代があったのだと思う。ところが、先ほどどなたかが述べられたが、先生そのものを軽蔑するような人もいるということなので、それはいかがなものかなと思う。

何が解決方法かという、即効薬はない。ただ、そういうがらりと崩れてきたものをやはり一つずつ、地域にしる学校の先生にしる家庭にしる、繕っていかなくてはいけないのではないかと。時間のかかること、壊した時間の何倍もの時間がかかることではないかと。思う。

鈴木忠志さんは日本文化というのは他人が居ることを感じる文化だと語っていた。何かというと、例えばぶすまがあたり隣のうちがあたり、つまり常にほかの人がいるということを感じるのが日本の文化だということなのである。それから言うと、例えば、隣近所の目があるからどうかこうとかと自分を律するということがあるし、こんなことをしたら隣の人が嫌がるだろうからという気配りというものがある大人の世界にあり、それを子どもが見習ってきたのではないかと。思う。地域のそうしたものが薄らいできたということも、社会現象としてはあるのではないかと。

先ほどの報告の中で、子どもの自己存在感というか、居場所、自分がそこにいるという実感というものを子どもが求めているのだという報告があった。学習にしる心の問題にしる、その気にさせるというか、特にその心の問題というのは、数学や国語のように点数になって表れてくるものではない、数量で測ることはできないのだから、やはりいいことすればいいことをしたという、その気にさせるような褒め方というのはあると思う。そういうことも日常的な教育の現場で必要になるかと思う。先生が忙しいかどうかというのは私は分からないが、やはりどこに目を向けて先生の仕事をするかというと、子どもに目を向けていなければならない。

話は違うが、作詞家の阿木燿子さんが講演会で、夫の宇崎竜童さんから「燿子、君は美しい、美しい」と、一日何回も毎日毎日言われると語っていた。本人はその気になってしまって、確かに美しいのだが、言われたいよりも言われた方がいいし、一日1回でも2回でもということで、そうした気持ちの持たせ方、そのようなものもやはり家庭においても社会においても学校においても重要なのではないかと思う。そういうことによって、全てではないが、一人でも二人でも救うことができれば、それは非常に素晴らしいことかなと思っている。

(委員) ここ1年、私の会社で感じたことお話しする。先ほど「仕掛け」という言葉と「現場」という言葉が出てきたかと思うが、最近では「現場力」という言葉が使われている。ここ1年間で3回ほど、私の会社の約60チームあるQCサークル、これは知事にもこの間聞いていただいたが、それらのチームが改善している現場、実際に自分たちがやっている仕事でこういうことを改善したというところを私あるいは役員が直接その現場へ行って聞くということを行った。

ちょうど今から1年前にこの第1回目をやった。さん、これはもっとこういうところを攻めた方がいいんじゃないかなと言ってきた。直接自分の字で、こうしたらいい、ああしたらいい、ここをもっと攻めたらいいと、大きなゲラのところへ書いてくる。

それで大丈夫かなと思っていたのだが、2回目、おやっと思ったのは、2回目の発表をしてくれた子が、1回目の発表の反省を踏まえながら素晴らしい発表をしてくれた。「お、これは違うな」と思って、今度3回目をやって、今日はこれから4回目に行くのだが、副社長とも話をして、これいいなど。先ほど梅沢さんの方から褒めるという言葉があったが、やはり褒める。いいことを徹底して褒めて、悪いことは注意というか、注意ではなくて、こうしたらもっと良くなるねというふうにする。実際にそういうことをやっているわけだが、それによって職場環境が良くなる、挨拶が良くなる、それと、私どもが一番の目的としている品質が良くなる、プラス、結果的には収益にも結び付いてくるということになる。

最後に、先ほどの座長は素晴らしいと思った。「ココスって何ですか」と聞かれる。分からないことを聞くというのは、それは大学の学長だったら分からないことはないだろう、聞くのが恥ずかしいかと思うけれど、あの質問は素晴らしいことだと思うし、恐らくあの学校も相当良くなるだろうと。言いたかったのは、学校でいえば、校長さん、副校長さん、教頭さん、それから先生、生徒という形になると思う。私どもは社長、副社長に専務、それから先生に値するのが課長さん、工場長さんかなと。それで社員がいる、これは生徒だとしたら、私は以前に校長先生の権威というのは全くないということをおあるところで聞いた。やはり校長先生あるいは私は、社長である以上は大事な子ですから、大事な会社ですから、大事な学校ですからということからすると、もっともっと校長先生によって、恐らく学校も変わると思うし、会社も一緒である。何といても社長が変わらなければ会社も変わらないという、あっちに飛んだりこっちに飛んだりしたが、そういうことを今日皆さんの話を聞きながら感じた。

(座長) ありがとうございます。私も意欲が出てまいりました(笑)。

今、学校中心の話をうかがったが、この後、知事と八木委員の意見を聞いた上で、今度は地域や家庭に若干焦点を絞って、話題を移したい。

(石井知事) 皆さんに大変貴重なお話を聞かせていただき、大変勉強になった。やはりいじめや不

登校の問題を改善していくには本当に様々な角度からのアプローチが要るのだなと、また処方せんも本当にいろいろな点に目配りをして総合的にやらなければいけないなということに改めて痛感した。

少し感想めいた話になるが、それにしても私は話を聞いていて、本でも読んだりしているが、今の子どもたちが相手に「死ね」とか「消えろ」とか「うせろ」とか、こういうふうな言葉を使うというのは、自分の子どもの頃を思うと信じられない。私の子どもの頃でもガキ大将はいたし、いじめっ子的な人もいないわけではなかったけれど、「死ね」という言葉はあまり使わなかった気がする。どうしてかなと思うと、やはり学校で勉強もしたけれども、小学校、中学校、例えば小学校のころであれば下校時にその校舎の周辺で一緒に牛ヶ首用水に入ってナマズを捕ったり、それで土地改良区のおじさんにお叱りを受けたり、一緒に相撲を取って、けんかしたりはしましたが、やはり何かこう、みんなでお互いに友達だ仲間だと、そういう一種の連帯感があった気がする。子どもたちが気軽に「死ね」とか「消えろ」と相手に言えるということは、やはり何か今の社会の反映というか。子どもはやはり親の背中、あるいは地域、あるいはテレビや新聞を通じての、子どもたちが理解している社会の影響を受けてそういうふうを感じたり行動したりするわけである。先ほどのテレビゲームの話も含めて非常に刺激的なものが増えているし、そういうものに影響を受けているのか、そういうことも含めてどうしたらいいのか、次に考えなくてはいけないなと思う。

それから先ほど、家庭、親の問題が出た。確かに私も学校の現場の先生方から聞くことがある。最近ではモンスターペアレントという言葉もあるそうだが、本当に自己中心的な親御さんがかつてに比べると随分増えている。従って、ご承知のように県も「親を学び伝える学習プログラム」というものも去年あたりから準備して始めている。そういったことにもこれからも努力しなくてはならない。

それから、先ほどからカウンセラーをもっと充実すべきだという話もあり、それももっともだなと思う。また、学校の先生が少し忙しすぎるのではないかと、もっともっと子どもと向き合う時間を持つような、それ以外の仕事を少し整理してはどうかという話ももっともである。同時に、先ほどの話の中で、シニアの人たちの知恵や経験をうまく現場に生かしてやっていくべきだという話もそのとおりである。幼児教育の話になるが、シニアサポート、それから学校を引けた後の放課後児童クラブ、あるいはさんさん広場のようなものも含めて、せっかく多様な人生経験を持っておられるので、シニアの方に次代を担う子どもたちを健全に育成するところでもっと力を発揮して欲しい。

同時に、父母の方が、担任の当たり外れと言うのは困ったものだという話があったが、確かにそういうことも困るが、そういうことを子どもたちの前で言うなんて言語道断だと思う。しかし同時に自分の子どものことを考えると、それぞれ素晴らしい先生に教育いただいたのだが、確かに、その当時も、また何年たっても、非常にこの先生は好きだなとか、本当に自分のことを考えてくれているなと思える先生と、一生懸命やっていたけど、必ずしもそういうふうには感じられなかった先生と、子ども心にはやはりある。だから、私はそれは単なるスキルの問題ではなく、志の問題もあるのだろうと思う。また、今の先生がいろいろな事務的なことが多過ぎて、なかなか一人一人の子どもたちと向き合えないという問題もあるのだと思う。幸い富山県は小教研や中教研など、先生方が自発的に研究会を作って頑張っているほど立派な先生が多い土地柄だが、もう少しさらに一人一人の先生方の総合的な教育力が高まるようにするにはどうしたらいいのか、こういうことも、いじめ・不登校の問題、もちろん学校だけの問題ではないのだが、十分承知の上で、八木教育委員長もおられるが、よく考えてみたいと思っている。

(八木教育委員長) 今、知事の方からいろいろと話もあり、大変もっともな話が多い。

私は教員についてだけ少し述べたい。本来、教員にいかなる場合でも必要な資質であるが、子どもはそれぞれ違うわけである。今の話を伺っていても、いじめであれ不登校であれ、それぞれの子どもの事情というものは実に様々なのだらうと思う。そうした違いというものを見抜く目がどうしても必要だと思う。もちろんすべての教員がそのようになるというのはそれは難しいかもしれないが、そういう方向を目指すことはどうしても必要だらうと思う。

さらには、子どもの言い分というものも十分に聞かなくてはいけない。これも、認定評価が要るのかもしれないが、そのようにうまく言える子どもばかりとは限らないから、教員側、親側、大人側で、聞いてやらないといけないだらうという気がする。ただ聞いただけで全部いいことばかり言うかどうか、それは分からない。「それは君、違うよ」と言わなくてはならない部分もあるかもしれないけれど、その前によくよく話を聞かないといけないと思う。

なかなかちゃんと言わない子どももいるから、そのときは先生が管理職に対して、もちろん同じことだらう。逆に言うと、管理職から先生に対してもひょっとすると同じかもしれない。とすると何でも言える雰囲気をつくるというのは、非常に大事なことだと思う。この世の中、信用というか、信義というものが非常に大事であるので、それが崩れ去ったのではどうしようもない。

だから、そういうことの上に立って何でも言えるという雰囲気というものはぜひとも醸成しなければならないと思う。教育委員会の方でもそういった点には今後とも十分に気を付けて、その支援をしなければならないと思っている。

(座長) 非常に根底的な話である。

これまで学校中心の話をうかがったが、やはり学校だけにとどまらず、家庭や地域の話も既に出ている。そういう意味ではあまり意識しなくていいが、今日のテーマについて全体的な意見、言い足りなかったことその他いろいろ含めてお願いしたい。

私も先ほど、どうしたらなくなるのかなと思って、この「いじめ対応ハンドブック」というのを見ていたら、13ページの三つ目に、三つの間違いの一つ、「いじめられた子どもは強くなるべきだ」と、私はいつもこう思っていたが、これは間違いの一つのようである。

(委員) 少し話題がそれるが、いじめの認識の三つの間違いというのは、あまり正しくないなと僕は思っているのですが。

それから、先ほどもちらっと言ったが、いわゆる不登校、引きこもりの原因というのはもうほとんど分かっている。一応僕も講演では、表向きは複合汚染ですという言い方をするが、実際は、ぶっちゃけた話をすれば、まず責任上は親である。ただ、親はどうしてそうさせたかという、背景はある、環境はある、と思っている。それが結局、こういう世の中ですからどうしても自己中心的にならざるを得ない。当然その原因の一つにはマスコミもあるだらうし、親をそのようにさせている原因というのは結構ある。親がさせているという環境はあると思うが、実際は親だと思っている。

それからその解決策、これもそんなに難しくないのだから、僕は今日は提案、たたき台の一つになればいいと思うのだが、読売新聞に小学生は必ず山村漁村体験をやらせようとしていた。僕はこれに大賛成なのである。この前、東国原知事が徴兵制について発言して物議をかもししたが、徴兵制と言ってしまうからまずいので、若い者たちが昔の若衆宿的に共同生活するということはそんなに悪いことではないと思っている。青年になるもっと前に、予防策として、9~10歳でいわゆる共同生活をさせる。子どもたちのその年齢が一番いいのではないかとと思っている。その共同生活の期間はどれくらいかという

いろな人に聞いたのだが、本当は1年ぐらい必要なのだが、2週間ぐらいかなということで、僕はそれをやったらいい、それが一番早い解決策だと思っている。

それにはどうしたらいいかというと、やはり国でいう文科省管轄で考えるとどうしても責任上ということになってしまう。だからそれをもっと広げて、国でいえば厚労省なり農水省がもっと音頭を取ってやった方がいいと。その間学校の先生はどうするか。僕は別に休みでもいいと思っている。現場ではこうだ、現場ではこうだというよりも、ではどうするという意見をもっと言った方が僕は建設的ではないかと思っている。

今こうやって変な言い方をしているが、僕がある小学校でPTAの会長をしていたことがある。そのときに一つの企画として、お泊まり保育をやった。1泊でキャンプをしようということで、テントのない人は体育館に泊まろうと。当然親も来て親子一緒に。そのとき、校長といろいろ話して、大人が集まるのだからお酒一杯ぐらいいいだろう、それからキャンプファイアーもやろうと。校長は、大人が集まるのだからそれぐらいしょうがないでしょう、キャンプファイアーは子どものためということで。ところが、校長が教育委員会に言ったら教育委員会の答えはNOで、二つとも断られた。校長は、なぜお酒を飲んではいけないのか、昔はよくあったではないかという話をしてくれたらしいのだが、学校で酒を飲むというのは相成らん。なぜか。そのために公民館があるのだという話になったのだと。キャンプファイアーも駄目だと。なぜか。校庭が汚れるから。その辺が少し、僕は「あー」と思ったのだが、実行して、結局大人同士でするのでお酒は飲んでしまった、当然。そのときにいろいろな話が子どもたちから聞けた。その中で、あるクラスで学級崩壊があったということ子どもが言ってきた。ですから、地域と学校というのはもっとくっついた方がいい、そのためには、学校の先生はもっとのんびりした方がいいと僕は思っている。

(委員) 少し違った観点で述べたい。

私自身は今、年齢が36で、先ほどここ数年の中でいじめが相当出てきたという話があったが、正直、私が小学生のときどうだったかという、やはりいじめはあった。今ほど深いいじめはなかったかもしれないが、正直やはり「死ぬ」という言葉も普通に使われていた。「消えろ」とかそういう言葉はさすがになかったが、そんな時代だった。もちろん深さは全然違うとしても、それから25年ぐらいがたってきて、それがますます深い問題になってきていると。そうすると、もしかしたらわれわれ20代・30代・40代の人間がそのいじめというものを知りながらも、その25年間30年間をほったらかしにしてきたことと一緒に思う。知っていながらにして自分の子どもまでがそういうことをやっている、そういうものを受けているということの現実を見てしまうと、やはりその25~30年ぐらいを経験してきたわれわれ20代・30代・40代の大人の大きな責任だろうと一つ強く感じている。

では、今こういったところで話をするのもそうであろうし、タウンミーティングやわれわれ青年会議所の中でも家庭教育の問題について、特に親に注目して何かフォーラムを行ったり、そういうことを現実にはしているのだが、そこに来る人間というのは正直、意識の高い人間でしかないというのが現状だと思う今後の進め方にしても何にしても、意識の高い人間だけで物事が変わるわけでもないし、PTAだけで物事が変わるわけでもない、もちろん学校だけで変わるわけでは絶対ないと思う。いかに自覚を持った人間が一人でも増えて、すそ野が広がっていくか、が一番大事なことなのではないかと思う。

そういったことを考えていくと、特にわれわれ企業で仕事をしている中においても、たかだか挨拶ができない、たかだかトイレの靴をそろえることができないというような、ほんのちょっとしたこと

で頭を悩めたりすることがたくさんある。それは時代が変わってきたからで済む話ではなくて、そういったところから一から直さなくてはならないことがあるのだろうが、そういったことが分からない世代、われわれの世代のそういう考え方をいかに変えさせていくかということを考えてときに、ここ5年ぐらいの間で企業は特に環境問題にすごく力を入れなくてはいけなくなってきて、その現状というのはよく理解するようになってきた。しかし、もしかしたら大きいことというのは、この環境自身も大事だが、地域だけではなくて、それこそ次世代の教育に対してということも、今まではやる必要もなかったとはいえないかもしれないが、いよいよこれからは企業自身もそこに力を入れていかなければいけない時代になってきているのだろうと思った。ある意味、大人を縛る場所というのはもしかしたら企業の中にしかないのかもしれないと考えたときに、その場をしっかりと利用して、その中から一応大人として何をすべきなのかということの根本から、草の根運動的な形で何か教育していくことが非常に大事になってきている時代なのではないかと感じている。

(委員) PTAの立場で述べさせていただく。いろいろと意見が出ており、本当に校長先生方はいろいろご苦労されてやっておられるのだと、正直すごく実感した次第である。

まず、学校として道徳の時間をもう少し考えてもらいたいと思う。例えばカウンセラーの方々やそのような方々にしても、道徳の時間に社会人・企業人の方々に来ていただいてお話ししていただく、そういう道徳の時間、徳育の時間を設けていただきたい。やはり心が病んでいるからではないのか、いじめられる方、いじめる方、両方そうではないかなと。そしてまた、不登校もやはり心が病んでいるからではないかと思う。

実は、私自身、いじめられた人間である。先ほど校長から話があったが、いじめられている人間はそれを言えない。先生がそれに気付いてくれて、先生がすごく私の環境を整えてくれた。そのときに私は何を感じたか。皆さんはいろいろと、褒めることとかいろいろなことを述べられ、まさしくそのとおりだと思う。しかし、見てくれているということなのである。自分を見てくれている。自分はいじめられていても、ふと見たら先生がそこにいたのである。だから、私はやはりいじめられている子、いじめている子も、どこかやはり心が病んでいて何か褒めてもらいたい、何かいつも見てほしい、誰かに支えてほしい、振り返ったときにそこに先生がいる、親がいる、地域の人たちがいる、そのような環境を整えてあげることで、私はいじめや不登校が減るのではなかろうかと思っている。やはり心の病であるから、心を親ともどもにどのようにして教育していくか。親も教育していかなければいけない。ですから、親も教育していくに当たって、どういう場を設けてそういうふうにして教育していくのか。いろいろな方々に来ていただいて、お話ししていただくのもいい、難しい話をするのもいい、手法手段はいろいろとあると思いますが、やはりそういう時間をつくるということが私は大事だと思っている。

(委員) 統計についてだが、中学校1年生がいじめが一番多い。2年から減っていく。けれども、だから2年生からいじめが減るということでは必ずしもない。1年生から2年生が中学生が一番発達段階の上で変わる年で、いじめを受けていても絶対に言わない。1年生とは違った面が出てくるので減っていく。逆に、不登校は1年から2年で増えている。であるから、そういう統計というのは必ずしも実態ではなくて、見る人の目というものと関係あるということで、統計そのものをどう考えるかということが重要だと思う。

富山の認知件数が多いという統計が出ているが、これは富山が多いということでは必ずしもなくて、

先生方の厳しく子どもを見る目があるということで件数が多く出てくるのではないだろうか。これは警察の統計なども同じ面があるが、そういう目で見ていく必要があると思う。

さらに統計のことで言うと、不登校は平成3年からの統計が出ている。これは学校基本調査という文部科学省がずっと5月1日現在で取っている統計だが、なぜ平成3年からかと言うと、平成2年までと統計の取り方が変わったから。どう変わったかと言うと、平成3年からは年間30日以上長期欠席、病気や何かを除いた長期欠席となった。それ以前は50日だった。50日から30日に変わったときにだいぶ統計上の件数は増える。それから、理由の欄です。文科省の統計の理由のところ、平成2年までは「学校嫌い」と書いてあった。学校嫌いなものだから「登校拒否」という言葉を行政的には使っていたが、一般的には学校嫌いとは限らないということで、理由欄に書く言葉が「不登校」に変わった。ただ、不登校というのは今いろいろな方が言われたように、大変多様であって、不登校という一つの言葉でなかなかくれない面もあると思う。

そういう行政的な統計では、年間何十日以上ということで数字が出てくる。全国的な統計ではそういう統計のレベルでしかないかと思うが、地域のレベルで子どもたちの不登校のパターン、欠席のパターンというものをもっときめ細かく調べていくと、日数だけの問題ではない。であるからこれからの検討においては、そういうデータを出していくということもある。明治時代は日々の出席日数という統計まで全国的に取られている。今はそういうことにはなっていないが。

それから、子どもたちにどう対応するかということであるが、「いじめ対応ハンドブック」というのは大変いいなと私は拝見している。同時に、子供に向けたハンドブックのようなのは作れないものかと思った。どういうことをするといじめになるのですよと、相手にどういう気持ちを与えるのかということとは子どもたちは分からないということもある。であるから、子どもたちに向けたハンドブックが必要なかなと思っている。しかし、いずれにしても、大勢の方が言われたように、問題行動を指摘してそれについて指導するというのももちろん必要であろうが、子どもを認知するとか褒めるということ、認めるということが必要である。最近ある校長先生から伺った話ですが、中学校で大変困っている生徒がいた。ところがその生徒が運動会でものすごく頑張っていて、棒倒しやそういうところで下敷きになって頑張っていた。それで早速、その校長先生はその写真を撮って、その写真を大写にして、「男の顔」というタイトルを付けて廊下に飾った。それがきっかけでその子どもは、学力はすぐ伸びていったわけではないが、悪いこともしなくなって変わっていった。大勢の方が言われたことと同じだが、そういういいことを見つけて褒めていくということが、悪いことを発見するというのも重要であるが、先生方に必要と思う。

不登校に関して、私も不登校の子どもと少年自然の家などで生活したことがあるが、そういうところに来てグループづくりをやった途端に、自分のグループに入った子どもの顔を見て、帰ってしまう子どもが結構多い。つまり、人間関係がつかれない。嫌だなと、人の顔を見て帰ってしまう。兄弟で来ることも多いのですが、人と人の関係づくりをするということが大事である。それは地域の問題になると思うが。先ほど山村留学の、山村、山の体験ですかね、私も実は放送大学で山村留学を詳しく取材したことがあるが、短期間山に行くと経験をすると、それをきっかけにそこに長期間留学してしまう子どももいる。それは都会とは違った子どもとの接触、それから地域のおじいさんおばあさんが非常に喜ぶ、自分たちはおじいさん、おばあさんのためにもなっていると、いろいろ親切にしてもらっている反面、逆の面もあるということに気づく。必ずしも問題のある子どもがそこに行っているわけではないが、そこからその子のいい面が育っていくということがある。山村留学は一つの形態にすぎないが、そういう違った地域を体験する、相互交流のようなことも重要ではないかと思っている。

(委員) 今、言われたように自己有用感といいますか、自分の活躍の場というのが先ほどから挙がっている。学校や家庭だけではなくて、実は、先ほど農村とか漁村とか体験の話が出ていて私も賛成なのですが、第3の場で活躍する場をつくってあげることがとても大事だと思う。スポーツ少年団は、6年生で終わると皆さん思われるだろうが、そうではなくて本当は指導者、20歳になるまでの活動、プログラムがある。その中で青少年の健全育成を目的として、子どもたちに子どもたちの面倒を見させる、あるいは大人とのパイプ役をさせる訓練というか指導を行っている。私も実はいじめられた子で、学校ではどちらかというと活躍できなかった子であったが、このプログラムがあったことで、外でほかのスポーツ少年団の団員たちのお姉さん役であったし、そこですごくいろいろなことを、立場が変わって自分だけではなくて自分が指導する立場になったときに、自分が思ってもみなかったほど活躍できる自分の場所が見つかったという体験者の一人である。

そういう第3の活躍の場、これは同年代ではなくて、縦の中でいろいろな年代がいる中で、先ほどのおじいちゃんおばあちゃんというのもそうであるし、そういう年代が違う中での活躍の場づくりに少しご協力いただきたいと思う。スポーツ少年団ではなかなか予算の方を盛っていただけないが、他県の例だと、スポーツ少年団の子たちの希望者が集まって交流大会を行うものがある。交流大会の面倒を中学生・高校生の子たちが見る。班付きリーダーという形で子どもたちの面倒を見ていくと、自分は責任ある立場だということで少し自分に自信を持っていける、心が変わってきている例もたくさん見ている。ぜひそういう場を教育委員会の方で持っていたらと思っている。よろしくお願したい。

(委員) 明日のとやま教育創造懇話会なので、富山という土地柄のバックグラウンドをぜひ生かした教育環境をつくっていかなくてはいけないと思っている。それで、あえて反論を恐れずに言うならば、富山の気象条件は、昔は忍耐力を育てた気候条件だったと思うが、今はむしろ冬場は子どもが外に出にくいとか、そして家の中にはいろいろな便利な誘惑がいっぱいあるという状況なので、富山県民の県民性、つまり非常にまじめで教育や学業や成果を重視する県民性や気候風土、日照率が低いとか、こういうことが別のところから見たときに心の病にかかりやすい環境の部分もあるということ踏まえて、これからは考えていかなくてはいけない。このようなことに配慮しながら、富山としての特徴を出せばという意見である。

(座長) まだお聞きしたいのだが、時間の関係もあるので、知事に最後に一言お願したい。

(石井知事) 今日は本当にいろいろな貴重なご意見をありがとうございました。

先ほどおっしゃった、やはり自然体験や農山村留学といいますか、そういうことで自然と触れ合う農作業ということが大事だというのは私もそうではないかなと思っている。大人の問題も含めて、様々な地域・家庭・学校、それぞれに課題があることもよく分かった。今の自然の問題、農作業やそういうことも含めてだが、最後に富山の気象条件その他やマイナスイメージのお話もあって、そういう点もあるが、一方で富山県というのは、私もあらためて知事という立場でいろいろなことを勉強していますと、次代を担う子どもたちに、素晴らしい魅力のある地域である。そのふるさとの良さ、例えば砺波のある公民館で、この地域のお社や祭り、ホテルがここで飛び交っている、こういうことの地域の良さを子どもたちに教える。その中で地域に愛着を持つ、誇りを持つ、それが子どもたちの張り合

いになる。このようなことをやっている人たちがいますが、私はこういういじめ・不登校やいろいろな問題、学校教育の問題も、先ほど例えば親子の触れ合いのようなところで、キャンプでお酒を飲むとか飲まないとかという話もありましたが、ある面ではその学校教育と幅広い社会教育といったものをもう少し垣根を取って、総合的に展開していく、それが幅広い意味での富山県の魅力、それは単に自然だけではなくて歴史・文化、それから委員のお話にあったように、地道だけれどもものづくりを一生懸命取り組んで頑張っている若い人たちも、壮年の人も、高齢者もいらっしゃる、そういう富山県民の営み、生きざま、それを子どもたちにもっと小さいころから感じさせて、その中で子どもたちのいろいろな課題を解決していくというふうに、幅広く取り上げていきたいなと思っている。